

栃木市立美術館館長  
すぎむら ひろや  
杉村 浩哉 さん

令和4年11月3日に旧栃木市役所本庁舎跡地にて開館した栃木市立美術館の館長を務めている杉村さんにお話を伺いました。

「うらさき」を生み出す企画展  
館長としての仕事は、主に企画展の計画や準備、作品の収集などがあるそうです。限られた予算の中でどのような企画展を行い、どんな作品を展示するか検討し、他の美術館から作品を借りるための交渉なども行います。「新しい美術館は、開館から数年間のうちに、どんな企画展を行うかで、館とし

てのブランドイメージやカラーが出来上がります。栃木市らしさを出せるような企画展を意識しています。」  
また、作品を借りる際には、通常は館の実績をもとに交渉を行います。が、栃木市立美術館はまだ実績も少ないため、杉村さん自身の経験や実績をもとに交渉を行うことも多いと言います。「新しい美術館ならではの大変な部分ではありますが、それがやりがいでもあります。」と笑顔で話します。  
「現在企画展を行っている清水登之をはじめ、栃木市ゆかりの作家は数多くいます。その点は栃木市の大きな強みなので、多くの方に知ってもらえるようにアピールしていきたいです。」  
美術館の運営において、杉村さんが大切にしているのは「雰囲気作り」。「美術館の仕事は学芸員だけでなく、事務職員やその他多くの方が協力し合って成り立っています。そのため、誰でも意見を出しやすい雰囲気作りが重要です。事務職員が提案した『浮世絵ヨガ』というイベントも好評をいただきました。」と嬉しそうに話します。  
また、「美術館は職員だけで作っていくものではありません。市内外問わず多くの方に美術館を使ってもらって、楽しんでもらって、一緒に育てて作っていききたいです。こじんまりとしているけれども『大きな』美術館を目指しています。」と将来のビジョンを語ってくれました。

# 登之



## 人生を変えた出会い

栃木県立美術館で学芸員を務めてきた杉村さんの出身は静岡県。元々、栃木にはゆかりがなかったと言います。「学生時代に栃木県立美術館のデヴィッド・ナッシュの企画展をみて、イギリスの作家と栃木の職人の技術との融合に感動し、こんな美術館で働きたいと思うようになりました。」その後、学芸員として採用され、36年間勤務しました。そして退職後に、栃木市立美術館の館長への就任依頼を受け、現在に至ります。

「うらさき」を生み出す企画展  
館長としての仕事は、主に企画展の計画や準備、作品の収集などがあるそうです。限られた予算の中でどのような企画展を行い、どんな作品を展示するか検討し、他の美術館から作品を借りるための交渉なども行います。「新しい美術館は、開館から数年間のうちに、どんな企画展を行うかで、館とし

# 令和元年東日本台風被害からの復旧状況

(栃木土木事務所からのお知らせ)

## 巴波川浸水対策

河川激甚災害対策特別緊急事業に採択された巴波川地下捷水路(地下トンネル)区間 2.4km について、地下トンネル本体建設工事では、流出立坑(発進立坑)内でのシールド機の組み立てが完了し、掘進を開始するための準備工を施工しています。また、流入施設については、護岸工事の施工、流入立坑工事に着手しました。工事期間中、地域の皆様にはご不便をおかけしますが、ご協力をお願いします。

また、事業概要等は、下記の「県土ちゃんねる」にて情報発信していますので、ぜひご覧ください。

栃木県県土ちゃんねる  
『河川事業関係』



## 永野川改良復旧

災害復旧助成事業に採択された改良復旧区間約 10.6km のうち、令和6年12月末までに 7.9km の整備が完了し、1.9km で河道掘削・護岸工事を実施しています。残る区間も順次施工する予定です。また、改良復旧工事に伴い改築となる橋梁や取水堰等の構造物は、榎本堰が完成し、堰2基、橋梁3橋の工事を実施しています。工事期間中、地域の皆様にはご不便をおかけしますが、ご協力をお願いします。



(参考)  
永野川・巴波川改良復旧工事等  
安全協議会



巴波川 浸水対策  
永野川 改良復旧の問合せ  
栃木土木事務所 改良復旧課  
☎ (23) 3921



栃木市の治水事業の問合せ  
治水対策室  
☎ (21) 2785



## 「べらぼう」な栃木町人の「うがち」～その先進性～

歌麿が大作「品川の月」を描いたのは天明8(1788)年とされています。この頃、彼は薦重がプロデュースした狂歌絵本に次々と作品を提供し、その後、傑作とされる『画本虫撰』を発表しました。江戸で名が知られ始めていたものの、まだ「美人大首絵」が大流行する前で、「誰もが知る存在」ではありませんでした。

そんな時期に、栃木の町人たちは新進気鋭の浮世絵師である歌麿に「雪月花」の制作を依頼します。さらに、彼らは天明狂歌が江戸で大流行する先駆けの時期に、その中心人物である大田南畝とつながりを持っていました。

当時の江戸文学には「うがち」という理念がありました。これは「人情の機微や世の中の真実を鋭く巧みに表現すること」を意味しますが「流行の半歩先を行く視点」とも解釈できます。この視点を備えた栃木の町人たちは、歌麿の浮世絵や狂歌など最先端の江戸文化を、いち早く積極的に受け入れ

ていたのです。常識にとらわれず、型破りで革新的な行動力を持った「べらぼう」な先人たちの姿が浮かび上がります。



▲《品川の月》高精細複製画 江戸時代 天明8(1788)年頃 紙本着色 栃木市蔵  
原本：フリーア美術館所蔵(アメリカ・ワシントンD.C.)

☎ 歌麿を活かしたまちづくり協議会事務局  
(蔵の街課内)☎(21)2573



リアルタイム雨量  
河川水位観測情報

https://www.dif.pref.tochigi.lg.jp/  
リアルタイムで、雨量情報、河川水位情報、河川ライブカメラ等がご覧頂けます。

